

瀬美井先生が生徒発表にチャレンジしています！

4月22日(月)6限から選択「日本史」の授業で瀬美井先生が生徒発表に取り組み始めました。とかく「暗記教科」のイメージを中学校時代から抱きがちな生徒にとっては新鮮な形態の授業だと思います。

授業の最初に以下のような板書と説明がされました。

- ①感想カードの提出
- ②発表 「伝える」「聞く」
- ③疑うこと＝批判的思考能力



「歴史は勝者によって作られる」という意味でも、③の視点は大切だと思いました。

<生徒の発表> 4月22日 石橋昂季「クレオパトラ」 草野零旺「福沢諭吉」
5月13日 小塚堅斗「リンカーン」 小山勇太「織田信長」

(両日ともビデオ撮影しました)

各発表の最初に「何故その人を選んだのか」を生徒が言うのですが、「クレオパトラは美人として有名だから」「福沢諭吉は近代学問を教え、慶應義塾を作ったり、『学問のすすめ』等を書いて有名」「リンカーンは僕と同じ誕生日」など、など。小山君はそれを飛ばしていきなり内容の発表にいきましたが、最後に「ルール違反だけれど」と断りながら瀬美井先生から「歴史上の関心がある人物になぜ小山君は織田信長を選んだの」という質問が出され、「自分にとって有名だから」という答えを引き出しました。質問が次の生徒の発表の視点になるという循環がなされていくとおもしろいですね。

「何故それを選ぶのか？」という問いは、学習を進める時の対象と向き合う自分を確かめる重要なものです。私が三重大で総合演習の時間に取り組んだ「本づくり」で最も大切な問いでした。「自分から出発する学び」の決め手になるからです。ちょっとした動機でも、こだわりをもって学べばその動機自体が学習によって広がり、深まっていきます。20年前に本校の3年生の「総合学習」を成島先生とペアで取り組んだ時、生徒の動機が多かったのが「なんとなく」でした。その時「星」を「なんとなく」選んだ生徒に話を聞いていくと、部活が終わった帰路に見えた星(おそらく宵の明星)がとても綺麗だったことに感動した、とのことでした。動機を明確にしていくことは、学習の個性化につながる鍵ですね。

選んだ理由以外にも、発表する生徒の声や発表が聞きやすくなっている、質問がいくつも出される、それに授業で発表をすることに反対が出なかった、など瀬美井先生とともにこの間の本校の取り組みが徐々に生徒の中に定着してきていることを確認した授業でした。今後に期待です！

雑記

先日、千葉の柏市で開催された「地域民主教育研究会全国交流研究会」世話人会のついでに新橋のパナソニック汐留美術館に寄りました。ギュスタヴ・モローの「ファム・ファタル(運命の女または魔性の女)展」を観るためです。舞の褒美にヨハネの首を所望したサロメ、サムソンを惑わしたデリラなどの作品を、幸せな結婚生活を送った(妻とは早くに死別)モローが何故ファム・ファタルに取り憑かれたのか、彼の弟子のジョルジュ・ルオーが何故聖母マリアやキリストの聖顔を描き続けたのか、などを思いながら鑑賞しました。

<お知らせ> 11月2日から4日に千葉県柏市県民さわやかプラザで開催される「地域民主教育全国交流研究会」の「教師・学校」分科会で東葛看護専門学校の実践報告があります。第1図書室看護図書コーナーにある三上満・小林功著『患者さんの笑顔が見たい』を読んで同校の実践とカリキュラムに関心を持っていたので楽しみです。集会翌日の5日(火)に学校見学ができないか検討中です。関心がある方はお知らせ下さい。(出版時の校長・三上満氏は著名な教育者です。)

